

中、第24回の本研究会全国大会(久留米で開催)の実行委員長を務めさせて頂きました。带状疱疹を併発しながらの委員長でしたが、参加者2,000名・収支も黒という大会で終わることができ、ご協力いただいた方々に大変感謝しております。

当院は、妊婦以外は診療する変な外科医と精神科医がいますので、緩和ケア認定看護師資格を有する訪問看護師さん達との連携で、いわゆる緩和ケアチームとして地域医療に取り組んでおります。

バックベッドとしての入院も可能な診療所ですし、療養通所介護施設も近隣に立ち上げ地域のデイホスピスとして機能させながら、これからも知力と体力が続く限り歌う町医者をやっていこうと思っております。

今後ともよろしく願いたします。

◆ ◆ ◆ 第18回 在宅ホスピスケア実践シンポ ◆ ◆ ◆

～独居高齢者の在宅看取りはどこまで可能か～

勇美記念財団 独居高齢者の在宅看取りができる 地域づくりプロジェクト委託事業報告

実行委員長 長尾 和宏

平均寿命の延長に伴い単独世帯や虚弱な高齢夫婦のみの世帯が増えている。今後さらにすすむ少子化と多死化社会において、独居高齢者を誰がどこで看取っていくのかが大きな社会的課題である。看取りの場として、病院、施設、自宅、居宅等があるが、本人の希望に沿った形で誰かが看取る体制を構築することが急務である。最後を迎える場所として自宅を希望している高齢者は、全体で54.6%、75歳以上では56%を超えている。また一人暮らし高齢者に関する意識調査では、多少認知機能がおちている場合でも49.3%が自宅での介護を希望し、高度の認知症機能低下であっても12.8%がそのまま自宅での介護を希望しているという。しかし様々な理由で、実現不可能であったり、多くの人が諦めているという実態もある。一方、独居であっても本人の強い希望に応じて自宅看取りを可能としている地域もある。そこで、今回、在宅医療助成勇美記念財団の2017年度の事業として「独居老人の在宅看取りができる地域づくり」プロジェクトが企画された。その一環として10月21日に実践シンポが開催され大盛況であった。定員は140名であったが、チラシができる前に早々と参加予約が満員御礼となった。この話題への関心の高さがうかがえた。

午前、川本健太郎氏(立正大学)は研究者の立場から、川名理恵子氏(横須賀市)は行政の立場からその必要性を説いた。関本雅子氏と清水政克氏は在宅医の立場から神戸市における事例を示した。午後は鶴岡優子氏(栃木県)、井尾和雄氏(立川市)、二ノ坂保喜氏(福岡)、宇野さつき氏(神戸市)らが全国各地での現状を述べた。一方、都市部では在宅死の半数が孤独死であり、全国各地で年々増加しているという現実がある。そこで「死体格差」という話題の本を書かれている兵庫医大法医学教室の西尾教授に特別講演を賜った。西尾氏は「死体にも格差がある」とし、孤独死の男女比は7:3で、男性は女性より10歳くらい若く60代から70

代が多く、アルコール習慣と強く関連していると述べた。その後、たいへん活発な総合討議が行われた。独居高齢者の在宅看取りが文化となり、孤独死を出さない街づくりが今後の課題であることで意見が一致した。しかし孤独死はそんなに不幸なことなのか？という哲学的命題も投げかけられて終了した

本プロジェクトではさらに在宅看取りを希望する独居高齢者に対して、その希望を叶えるために、どのような障壁があるのか、地域にどのようなシステムを構築していくべきか分析を進める。現在、在宅医療の現場で独居高齢者の看取りを実践している全国各地の医療・介護者にアンケート調査を行っている。その結果は12月22日と3月17日に東京で開催される勉強会で発表する予定である。さらに2月10日には、在宅関係者の集まりである劇団「ザイタク」の第二弾として、「おひとり様でも、自分の家で”ピンピンコロリ”できるねんで！」という演劇をピッコロシアター（尼崎市）で上演する予定である。

こうした一連の活動を通して、これまでブラックボックスであった独居高齢者の在宅看取りへの関心が高まり、それを可能とする街づくりに寄与できれば幸いである。前例がまったくない壮大なテーマだけに、今後も日ホスの関係者みなさまのご協力・ご指導を宜しくお願い申し上げます。

清水メディカルクリニック 清水 政克

これからのわが国は超高齢多死社会に突入します。地域で独居高齢者が増加することは間違いなく、その人々の人生の最終段階をどう支えるかがこれからの地域の医療者に求められるはずです。今回の第18回在宅ホスピスケア実践シンポでは、勇美記念財団から委託を受け、「独居高齢者の在宅看取りはどこまで可能か」について議論を行いました。

まず最初に、立正大学社会福祉学部の川本健太郎さん、横須賀市地域医療推進課の川名利恵子さんから、地域・行政の取り組みをお話いただきました。川本さんは、離島などの人口が比較的少ない地域でのフィールドワークについてわかりやすくお話をいただきました。川名さんは、人口の多い横須賀市で広く行われている市民に対する在宅医療推進・啓蒙活動についてご報告いただきました。まちの規模によってそれぞれやり方は異なりますが、どちらにも共通していたことは、地域にあるリソースの力を最大限引き出すようなエンパワーメントに力を入れておられるように感じました。

次に、関本クリニック院長の関本雅子さんと私の方から、成功例と失敗例・その課題について具体的な事例をあげて発表し、その後フロアとディスカッションを行いました。関本さんはがんの方の在宅緩和ケアをメインに活動されており、倫理的に適切と思われる緩和ケアを在宅で提供できるかどうか、が成功と失敗の判断基準になるかもしれない、というお話でした。また、施設での看取りについてもお話いただきました。一方、私の方からは、本人の望んだ場所で最期を迎えることができたかどうか、最期に警察が介入した（検死となった）かどうか、も成功と失敗の判断基準の一つになりうる、という話をさせていただきました。フロアとのディスカッションでは、そもそも成功とか失敗ではなく、本人・家族が満足か不満足かではないか、という良いご指摘をいただくことができました。がん、非がんに関わらず、独居高齢者の在宅

看取りに対峙している現場の人々の悩みを、参加者で共有することができたように思います。

ランチオンセミナーでは、長尾クリニック院長の長尾和宏さんから独居高齢者の在宅看取りにおける現状と課題についてお話いただきました。医師法第20条と第21条の混同に基づく死亡診断の誤解について解説いただき、適切な死亡診断方法やこれからの遠隔診断についても述べていただきました。

午後からは特別講演として、兵庫医科大学法医学講座教授の西尾元さんから「死体格差」解剖医から見たおひとり様の最期とは、と題してお話いただきました。警察が取り扱う死体の中で実際に犯罪に関係のあるものは0.3%と少なく、同講座でも年間200-300体の解剖を行っているが犯罪が疑われる死体は約1/4であり、残りの3/4は死因が分からないものであるということでした。解剖となる死体の約50%が一人暮らし、約30%が精神疾患患者、約20%が生活保護受給者、約10%が自殺者、約5%が認知症患者、という詳細なデータも提示されました。また、解剖率の地域間格差は非常に大きいですが、今後の高齢化や未婚率の上昇などによって高齢者の孤独死などの異状死体が増加していくことが予想されます。特に、男性、一人暮らし、アルコール多飲、があると解剖されやすい、ということでした。解剖されないための方法としては、①社会との接点を作っておく、②日記をわかりやすいところに置いておく、③戸締まりをする、④男性は注意する、⑤アルコールはほどほどに、⑥解剖率が低い地域に住む、⑦寝たきり状態や認知症の方が居る人は同居でも同居と同じように注意する、⑧精神疾患や引きこもりの人に対する対応、が重要というお話でした。大変ウィットに富んだ面白いお話をしていただき、今後の独居高齢者が増加していく地域にとって非常に示唆に富む内容でした。

次に、各地域の事例に学ぶということで、つるかめ診療所所長の鶴岡優子さん、立川在宅ケアクリニック理事長の井尾和雄さん、にのさかクリニック院長の二ノ坂保喜さん、新国内科医院看護師の宇野さつきさん、から実際の地域での事例やデータをお示しいただきました。鶴岡さんは、独居というピンチはチャンスであり、本人の希望・周囲の覚悟・専門職チーム、があれば「家で最期まで」を実現することができるというお話をされました。井尾さんからは、独居高齢者の看取りは他の方々と同様に普通に可能であり、実際に誰が看取るのかを事前に想定しておくことが重要というお話でした。また、独居の後の死亡後の事務的処理の問題にも言及されました。二ノ坂さんからは、独居高齢者の看取りができる町づくり、という視点からお話いただきました。地域緩和ケアとしてのアプローチとして、地域（コミュニティ）という視点、文化・歴史への関わり・学び（死の学びを含む）、コミュニティへの視野の広がり、ネットワーク作り、などを通じて、新しい地域社会（コミュニティ）の創生が重要であるという内容でした。最後に、宇野さんからは独居高齢者を在宅で支えるための3つのポイントとして、キャッチする、予測する、つなぐ、ということが大切であるということ、実際の事例を通してお示しいただきました。患者の希望や地域のリソースをキャッチし、これからの病状や気持ちの変化を予測し、地域を支えるベストメンバーにつなぐ、ということで独居高齢者でも最期まで在宅で過ごすことが可能となる、ということでした。

シンポの一番最後の総合討論では、これまでの演者の皆さまにご登壇いただき、フロアからの実践的な質問を通じて活発なディスカッションを行うことができました。